

聖書神学とカトリック教会の教え

私が2000年から2014年までの15年間にわたって、主日のミサの朗読配分に仕がって毎週WebSiteに掲載してきた「聖書の学び」が、現在でも神のことばに耳を傾けようと願う信仰者たちによって毎週熱心に関覧され、福音の証しとして主によって用いられ続けていることを感謝したいと思います。

しかし残念ながらカトリック教会の信者の方々(司祭にせよ信徒にせよ)の中には、啓示憲章に「聖書の研究は神学の魂のようなものであるはずである」(24)と述べられていることを正しく理解していない人、あるいは見落としている人がかなり多いように見受けられますので、多少の解説と弁明を書くことが有益だと考えました。

新約聖書がキリスト教の正典として成立して以来、教会で長く用いられた聖書解釈の方法は、オリゲネス以来のアレゴリーによる「霊的解釈」でありました。この解釈の主な原動力は教会の教義であって、しばしばその教義に合わせてこじつけに陥り、聖書本文の字義的解釈が無視される傾向を持っていました。このような解釈方法から離れ、教義から独立した近代の歴史的批評的聖書解釈が大方の承認を得るようになったのは、ようやく19世紀以後のことです。20世紀にはそのような新しい聖書神学が、キリスト教界の多くの教養人たちを覚醒させました。カトリック教会も第二バチカン公会議の公文書において、積極的にこのような新しい聖書理解を取り込みました。特に「神の啓示に関する教義憲章」にはその成果が反映されています。

聖書の近代的批評的研究の萌芽は17世紀に遡ります。当時、初期の研究者の多くは教会から迫害を受けました。このような中にカトリック司祭では、シモン(彼の論文は刊行後ほとんど破棄された)やゲッティス(論文発表後に教導権を停止された)の名を挙げることが出来ます。

ほぼ一世紀の後、ドイツの神学者ガアブラーの1787年の教授就任講演が、ついにこれまで教会教義学の婢であった聖書神学に独立宣言を促したというのが、今日通説になっています。

このように聖書神学は若い神学であって、(不思議に思われるかもしれませんが)未だ教会の現場にはほとんど浸透してきていないというのが実情です。プロテスタントでもカトリックでも、信徒だけではなくて教導職にある人々(司祭や牧師)も聖書神学に関しては素人ばかりなのです！

神の啓示に関する教義憲章は、その序文で次のように述べます。

「・・・したがって、トリエント公会議と第一バチカン公会議の足跡を踏まえながらここに提示しようとするのは、神の啓示とその伝達についての正真の教えである。それは、全世界が救いの知らせを聞いて信じ、信じて希望し、希望して愛するようになるためである。」

そして第一章で、啓示そのものについて説明をしています。

「ところで、神と人間の救いについての深い真理がわれわれに明らかになるのは、この啓示によってであり、キリストにおいてなのである。キリストは、すべての啓示の仲介者であると同時に充滿だからである。」

そして、「それゆえ、肉となったみことばであり、“人々に”遣わされた“人”であるイエス・キリストは、“神のことばを語り”(ヨハ3:34)、父からなすようにとゆだねられた救いのわざを成し遂げる(ヨハ5:36,17:4参照)」と述べて、“キリスト = 啓示(の完成)”という理解を明確にしているのです。

この啓示(キリストとその福音 = 神のことば)の伝達者が使徒たちとその後継者である司教たちです。聖伝と聖書はこの“使徒たちから伝えられたこと”を内容とする教会に託された聖なる遺産であります。

そのようなわけで、聖書研究は“神学の魂のようなもの”とされています。さらにそれは教導職や専門の聖書学者だけではなくて、“聖書に近づく門戸は、キリスト信者に広く開かれていなければならない”と述べられています。ちなみに日本におけるフランススコ会訳の聖書は、このような第二バチカン公会議の意向を受けて出版されました。

一般に宗教の世界は保守的であって、“新しいものを欲しがらず、古いもののほうがよい”(ルカ5:39)という傾向があります。それでカトリック教会でも、新しい学問である聖書神学に対して無関心であったり拒否反応を示す人が多く見られます。

前教皇ベネディクト十六世が使徒的勧告“主のことば”で述べていることを、ここにご紹介しましょう。

「(聖書研究にとって)何よりも先ず必要なのは、歴史的・批判的釈義と、最近発展した他の本文分析の方法が教会生活にもたらした利益を知ることです。カトリックの聖書理解にとって、これらの方法に関心を向けることは不可欠です。」

「救いの歴史は神話ではなく、真の歴史です。それゆえそれは、真剣な歴史的研究方法によって研究されなければなりません。」

そして1993年の教皇庁聖書委員会の文書が引用されています。「その解釈の作業の中でカトリック聖書学者が決して忘れてはならないのは、・・・その作業の目的は、聖書本文の意味を神が今の現実に語りかけることばとして明らかにするのでなければ、達成されない。」